日本のプロコーチ宣言第1号　榎本日出夫（日立戸塚コーチ）

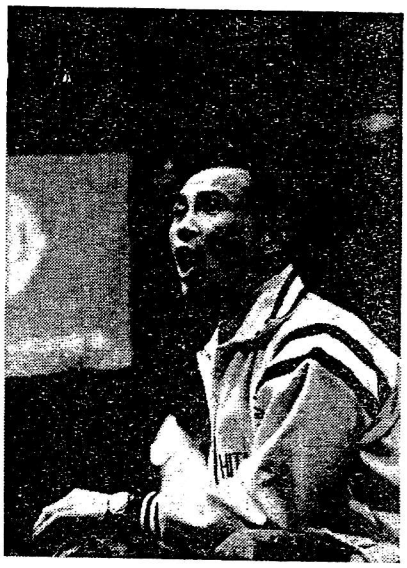
私のバスケット狂書

その(18)

遂に日本リーグ初優勝

私の考えと選手がピタリ一致

大きな"自信と経験"に



榎本日出夫
武蔵中学（東京）、武蔵高校（同）、武蔵大学（同）をそれぞれ卒業。
現在、女子実業団チームの日立戸塚コーチ。昭和十六年七月七日生まれ
〈現住所〉横浜市戸塚区舞岡町一二二ーロー六
電話〇四五（八二二）二七〇九番。

"40分間"精神を集中させる努力、またその他の目に見えない障害を乗り越えようとする自分なりの努力があったものの、この年、第9回日本リーグにおいて「初優勝」できた裏には、選手に恵まれたことも大きな原因だと思っています。

私自身、どちらかというと、「コーチ・指導者」というものは"わがまま"ではないかと感じているのです……。

というのは、自分自身もやったこともない未知の世界の技術や考えを選手にやってもらい、その結果といえば、いつも良いというわけにはいかず、かといって、自信に満ちた言動で迫っていかなければならないーというのは、責任の取り方という見地から言えば、いつもなさけなく無責任ではないかと私は感じています。

そんな気持を知ってか知らずか"青春の一時代"汗を流し、文句も言わずついてくる選手を見るにつけて、なんとか良い結果が出るようにと、頑張るものの、多くの場合はうまくいかず勝つことから見放される場合が多いのです。

しかし、この年は自分の考えと、選手の素材が"ピッタリ"合ったこともあって、本当に考えたとうりの「バスケット」が指導できたというのは、本当に自分自身幸せだという気持でした。

その上「V1」を達成できたというのは、この上ない自信と経験を私に与えてくれたこともたしかです。

その上、私自身は勝負には非常についていると感じたのは、日本リーグ入りの時もそうでしたが、この年も京都で"ナショナル"に気持を集中させていた尾崎さんの足元を見るように第一勧銀がそのスキをついて勝ってくれたのです。

これは本当に、私も選手も願ってもない"チャンス"だと感じました。そして反対に、気持をもっと引き締めてかからないと、戸塚にもスキをつかれることもありうる……と感じ、おおいに反省し、選手にもそういう態度で接しました。

その一例として、今迄負けてきた。しかし、今は勝っているけれどもそれに甘えず、人間として、会社の人からも決して、うしろ指をさされるような行動はしないでくれ。もし、負けた時は「ささいな一つの悪いこと」でも全員がやっているように"その原因"で負けたと言われるかもしれない。だから、人間として、自信を持つことも大切だが"天狗"にならず、いつも謙虚に行動してくれ、と全員にいつもミーティングで言い続けました。

そのかいあって、チームにはいつも小さいながらトラブルはヤ"（大塚選手）のキャプテンとしての性格が出たのか、前期が終って大きな問題もなく、後期に突入できました。後期に入るまで"目標"は第一勧銀一本にしぼり、とにかく勝てるためには――ということのみに集中して指導を続けました。

そのかいあって"優勝"を決めた第一勧銀戦では堅くなったものの、本当にベンチやVTRを振るプレイヤー、もちろんコートでプレイしている選手も含めて、また、応援して下さった多くの人達も含めて"一体となったゲーム"ができたと信じています。

そのため優勝を決められたのは、経験の瞬間だったのですが、なぜか人間というのはあさましいもので、次の日に山崎戦があるー、だったら、もう一つ勝って全勝で、などと思ったものですから、選手にもその気持が伝わってしまい、本当に気持をおさえた優勝の瞬間になってしまいました。

あとになって、オールジャパンに向って練習をしている時にもっと"素直"に表現すれば良かったのではないかと感じたりこの山崎に負けた一敗を何とか勝利の一勝に結びつけるようにくやしさを振り返って、後悔したり、いろいろ悩んだことも確かでした。

しかし、きびしい一カ月の努力をしたものの、オールジャパンに勝つというのは大変なことだと、日が近づくにつれて感じ始めてきました。この一敗をなんとか良い方向へ向けてやりたいと感じるのですが、あせるばかりというのが、本当の気持でした。

〈続く〉

＝前号までのあらすじ＝

十年前のある夜、杉野短大からコーチ依頼の電話を受け、好きなバスケットに接することができると深く考えずに引き受けたことが私の人生を変えた。その後、先輩や恩師のすすめもあり、日立戸塚を見るようになったが、この時、どうせやるなら―と「プロコーチ」の看板をあげ、バスケットでメシを食う決心を固めた。そして色々悩み、さまざまな経過、苦労を重ねた末に、ようやく日本リーグ入りを果したが、それまでの苦労を思い返した時、積もりつもった疲労もあってやめようかと考えたが、大好きな選手たちやバスケットを放り出してまで去る勇気はなく、結局、日本一の座を目指して、もう一度挑戦する決心を固めた。そして、その第一目標を当時日本リーグ第二位の座にいた第一勧銀におき、まず"素材集め"を皮切りに、本格的なティーム作りにのり出した。ようやく素材も集まり出したが、どうしても"異質の人間集団"であり、皆が同じ目標で練習に取り組む心の確立につとめ、基礎練習なども加えて四十九年度は日本リーグ、全日本総合とも三位となった。そして五十年。第九回日本リーグの第一戦、三菱戦を勝ちとり、さらに強敵ユニチカ山崎、第一勧銀にも連勝して好スタートを切った。そうしたなかで、常に冷静な集中力の体得に専念した。

"大事業"の全日本総合に照準

BASKET BALL IS MY LIFE